

「長野県中学校集団登山動向調査」のまとめ

長野県山岳総合センター

はじめに

長野県山岳総合センターでは、平成15年度に「中学校集団登山の現状と改善点」、平成16年度に「中学校集団登山危急時対策調査」、平成18年度及び22年度に「長野県中学校集団登山動向調査」を行った。

最後の調査から3年がたった今年度、平成25年度の長野県の中学校における集団登山の動向についてアンケート調査を実施した。

【調査対象】

県下の国立・公立・私立中学校（中等教育学校含む）と、特別支援学校中等部を含めた216校にアンケートを依頼。以下の集計結果には、特別支援学校20校は含まれていない。（特別支援学校全20校中、集団登山を実施しているのは1校のみ）

よって今年度の調査結果は、特別支援学校を除いた県下の公立・私立中学校196校からの回答をまとめたもの。

尚、H22と記したものは、上記の平成22年度の調査結果を示す。

アンケート結果

1. 登山の実施状況および目的とする山について

(1) 実施校数

H16とH18とH22、そして今回H25の中学校集団登山実施状況をまとめたのが下の表である。

登山実施状況の推移

調査年	調査校数	登山計画有		登山計画無	
		校数	%	校数	%
H25	196	170	87	26	13
H22	198	178	90	20	10
H18	189	171	90	18	10
H16	197	175	89	22	11

注：「登山計画有」には、隔年実施の学校および予定していたが天候の理由で中止となった7校も含まれる。

：H18の調査では、未回答が8校あった。

(2) 実施学年

登山実施校の8割近い学校が、2学年で登山を行なっている。

(3) 生徒の参加状況

計画段階から不参加の意思を表明していて、当日登山に参加しなかった生徒の割合は、登山実施学年の生徒数の約3.3パーセント。

不参加の理由が多かったものは、心身の不調や体調不良、怪我、家庭の事情等である。

(4) 目的とした山
目的とした山

山名	学校数
硫黄岳周辺	37
乗鞍岳	33
唐松岳周辺	26
西駒ヶ岳	18
燕岳	10
爺ヶ岳	9
御嶽山	9
仙丈ヶ岳	5
常念岳	6
奥穂高岳	2
西穂高岳	3
赤岳	3
岩菅山	3
その他	9

目的とした山別の学校数をまとめたのが左の表である。

「硫黄岳周辺」には、硫黄岳・根石岳・天狗岳・箕冠山・横岳・茶臼山・夏沢峠・茶臼山等北八ヶ岳周辺が含まれる。

「唐松岳周辺」は、丸山ケルンまで登った学校も含まれる。

「その他」の山として登られている山として、南アルプス烏帽子岳、倉沢岳、熊伏山、小河内岳、美ヶ原、苗場山(2校)、竜王山・焼額山、富士山が挙げられていた。

注：学校数の合計が、「登山計画有り」の170校より3校多いのは、3校が複数の山を目的としていたため。

下の表は、過去の調査との比較である。

過去の調査との比較

山名	H25の学校数	H22の学校数	H18の学校数	H15の学校数	H4の学校数
硫黄岳周辺	37	39	33	36	24
乗鞍岳	33	34	23	22	25
唐松岳周辺	26	26	32	29	1
西駒ヶ岳	18	20	19	26	32
燕岳	10	11	12	13	31
爺ヶ岳	9	10	9	12	6
御嶽山	9	9	8	11	4
仙丈ヶ岳	5	8	10	10	5
常念岳	6	5	0	6	6
西穂高岳	3	2	4	7	3
赤岳	3	2	1	4	9

(5) 登山の期日、日程

夏休み明けに登山を計画していた学校は170校中27校。

ほとんどの学校が1泊2日で日程を組んでいる。日帰りの学校は9校、2泊3日の学校は3校あった。

(6) 登山計画の変更について

最近の3年間（平成23年度から平成25年度までの3年間）に、登山計画の有無の変更や、目的とする山や登山コースの変更があった学校は37校。

主な変更理由は下記の通り。

- ・生徒にとっての負担を軽減するため。
- ・行動時間を短縮させるため。
- ・計画段階で、登山参加をあきらめる生徒が出ないように考えて。
- ・全員登頂の可能性を増やすため。
- ・1日で登頂できるように考えて。

- ・頂上アタックチャンスを1回から2回に増やせるため。
- ・安全性を増すため。
- ・生徒の負担軽減と安全面を考えて、ロープウェイ利用に変更した。
- ・緊急時の対応を考えて、車が奥まで入れるルートにした。
- ・緊急時に対応できる職員が少ないため。
- ・登山を中止しなくてもすむため。
- ・泊を伴わない登山にするため。
- ・生徒と職員にとって体力的に厳しいので。
- ・1, 2年合同実施から2年のみの実施に変更したので。
- ・生徒にとって、身近に感じられる山に変えた。(移動距離が減り、費用も減った)
- ・眺望を考えて。
- ・3000メートルの山に登りたいという理由。
- ・生徒が、より自然の偉大さ、美しさ、厳しさに触れることができ、登山での達成感を得ることができるようにと考えて。
- ・登山経験を通して、生徒に達成感を味あわせたり、励ましあって登ることで集団としての団結を深めたりしてほしいと願って、登山を実施するようにした。

2. 外部からの付き添いについて

(1) 外部からの付き添いの有無および内訳

外部からの付き添いが同行している学校は164校(96%)であった。付き添いが同行する学校の割合は、H22(90%)より増えている。

外部からの付き添いの内訳

付き添いの内訳	H25 学校数	H22 学校数
ガイド・案内人	137	150
看護師	57	65
医師	46	39
添乗員	44	
ボランティア	14	
カメラマン	12	
保護者	6	
保健師	4	
自然インストラクター	3	
その他	2	

付き添いの内訳及び同行した校数を集計したのが左の表である。「ガイド・案内人」「看護師」「医師」のみ、H22の数字を載せた。その他として、村役場職員(登山経験が豊富な方)、市職員(養護教諭の代替者として)の付き添いがあった。

左下の表は、「ガイド・案内人」を依頼した学校の割合の推移を示したもの。

ここ何年かは、8割近い学校が、「ガイド・案内人」に付き添ってもらって登山を行っている。

ガイド・案内人を依頼した学校の割合の推移

年度	H25	H22	H18	H16	H15	H4
割合(%)	81	84	78	75	59	37

(2) 外部からの付き添いについて課題と感じていること

外部からの付き添いについての課題として書かれていたのは下記の点である。

○付き添いの方の確保が難しい点

- ・特に医師や看護師の確保が難しい。
- ・登山日の近くにならないと付き添いの医師が決定しない。

- ・予備日に実施になった場合、付き添いをお願いできなくなることがある。
- ・学校登山に慣れたガイド、地元のガイドの方に付き添いをお願いしたい。
- ・ガイドや案内人を紹介してくれる機関があると嬉しい。

○付き添いの方にかかる費用の点

- ・ガイドの方を複数お願いしたいが、謝金の額の関係で頼めない。
- ・クラスに1名のガイドの方が付き添ってもらえるとありがたい。
- ・生徒数の減少により、生徒一人当たりの費用負担が大きくなる。
- ・人数と費用のバランス。
- ・医師若しくは看護師の付き添いがほしい。
- ・医師に付き添ってもらってありがたいが高額。

○付き添いの方の登山へのかかわりの点

- ・事前打ち合わせの時間を十分かける必要がある。
- ・事前打ち合わせの日程調整が難しい。
- ・事前学習の段階からかかわってもらいたい。

3. 装備について

(1) 隊で持参した装備

隊として（ガイドや医師が持っていった装備も含む）持っていった装備及び登山中に使用した装備は下の表の通り。

持参した装備名及び校数

装備名	持参した校数	登山中に使用した校数
救急医薬品	168	70
テーピングテープ	159	51
携帯酸素	150	32
トランシーバー	148	100
ロープ	135	4
冷却パック	131	15
携帯カイロ	87	18
ツェルト	87	6
さらし	85	1
副木	73	0
ラジオ	71	22
アルミ救急シート	68	2
カラビナ	52	1
背負子	49	3
パルスオキシメーター	39	21
AED	26	0
スリング	19	0

注：パルスオキシメーターとは、脈拍数と動脈血酸素飽和度を測定する医療機器

(2) 過去の調査との比較

持参した装備名及び校数(割合)の過去の調査との比較

装備名	H25	H22	H18	H15
ロープ	135校(79%)	128校(72%)	115校(79%)	136校(70%)
ツェルト	87校(51%)	77校(43%)	62校(42%)	27校(14%)
トランシーバー	147校(86%)	151校(85%)	126校(86%)	136校(70%)
ラジオ	71校(42%)	68校(38%)	70校(48%)	84校(43%)
さらし	85校(50%)	63校(35%)	76校(52%)	104校(54%)
背負子	49校(29%)	38校(21%)	70校(48%)	38校(20%)
カラビナ	52校(31%)	32校(18%)	26校(18%)	(項目に無し)
スリング	19校(11%)	13校(7%)	11校(8%)	(項目に無し)
救急用医薬品	168校(99%)	167校(94%)	139校(95%)	(項目に無し)

4. 登山中の体調不良等について

予定していた行動ができなくなった理由と人数

原因	生徒数
体調不良	117
頭痛、高山病	77
疲労、体力不足、気力不足	62
捻挫、足痛、ひざ痛、打撲	30
風邪、発熱	9
腹痛	8
登山前から予定していた	8
バス酔い	7
古傷悪化	4
高所恐怖症	3
過換気症候群	3
喘息	2
熱中症	1
肺炎	1
腰痛	1
股関節痛	1

入山したが、途中から急な発熱や怪我、アクシデントがあり引き返したり、体調不良のため山小屋で待機したりした等、予定していた行動ができなくなってしまった生徒は、登山に参加者した生徒の2パーセントに当たる334人。

予定していた行動ができなくなった理由の内訳は左の通り。

5. 事前学習や事前準備について

登山に向けての事前準備として、学校で取り組んだ活動内容と校数

取り組んだ活動内容	校数
登山のしおりを作成した	169
教師が下見登山を実施した(写真・ビデオ撮影・山小屋との打ち合わせ等)	168
下見時に撮影した写真を掲示したり、ビデオを生徒に見せたりした	168
参観日等に、保護者向けの説明会を開いた	168
事前に、生徒が登山本番の荷物を学校に背負ってくる機会を設けた	125
本番の登山に向けて、荷物を担いだり走ったりするようなトレーニングを実施した	106
本番の登山の前に、準備登山を実施した	69
外部の方(ガイド、山小屋の方、医師、添乗員等)から、生徒や保護者に話をしてもらおうような事前学習会を開催した	41

上記以外に取り組んだ活動内容には、下記のような活動があった

- ・登山通信を作成、各家庭に配布した。
- ・学校職員が、生徒に登山の魅力を話した。
- ・生徒の健康状態のチェックをして、心配な生徒は事前検診を実施した。
- ・一人一課題の調べ学習をした。
- ・事前に調べたことを発表する時間をとった。
- ・登山する山のことを班毎に調べ、まとめたものを掲示した。
- ・各班でテーマを決め、ネットや書物で調べた内容をまとめた登山新聞を作成した。
- ・登山靴登校を実施した。
- ・放課後に体力づくりとしてランニングをした。
- ・荷物を担いでの歩行トレーニングをした。
- ・行動訓練をする時間をとった。
- ・荷物検査をした。
- ・地域のスポーツ店の協力を得て、ザック、雨具、靴のレンタルをしてもらった。
- ・山で歌う歌の合唱練習をした。
- ・山の映画を鑑賞した。
- ・登山ビデオを観た。
- ・引率職員が登山コースの途中までの事前登山をした。
- ・山岳総合センターの研修会を受講した職員が、その資料を基に学習会を行った。

6. その他

- (1) 本年度の登山においての「ヒヤリ・ハット」事例には、下記のような事例があった
- ・体調を崩す生徒が多く、もし夜中に高熱が出たらという不安があった。
 - ・急な発熱により、肺炎を発症。同行した医師の判断により下山した。
 - ・下山途中、過呼吸の生徒の様態が悪化。医師の診断の結果ドクターヘリを要請したが、天候が悪く飛行不可。ガイドらが背負って下山。その際、携帯電話の電波状況が悪く、学校との連絡がとりにくく困った。
 - ・過呼吸の症状が強く出た生徒を、車で移動できる場所まで下ろすのがたいへんだった。
 - ・距離、行程的にちょうど中間地点で生徒が捻挫した。その後の対応について判断に迷った。
 - ・引率職員が体調不良になった。
 - ・登頂時に、恐怖心から腰が抜けて動けなくなった生徒がいた。
 - ・雨の中、トランシーバーの調子が悪くなり、通信不能になった。
 - ・ご来光を見に行ったら際、天候悪化による撤退判断に迷いがあった。
 - ・朝起きてすぐにご来光を見に行ったらところ、体調不良になった生徒がいた。
 - ・あまりの強風で、山頂をあきらめ引き返した。変わりやすい山の天候に対する判断の難しさを感じた。
 - ・天候が不安定であることを承知のうえでの実施のため、全体の行程をはやめに進めた。ロープウェイ駅に着くのと同時に激しい雨と雷に遭った。もう少し遅かったら危険だった。
 - ・小雨、強風のため、体温低下になり、吹き飛ばされそうになる生徒がいた。ガイドの早い判断で計画を変更した。
 - ・低体温症になりかけた生徒がいたが、着替えたら症状が改善した。
 - ・残雪上を歩く際、特別な指示や指導が無いまま登行を続けたところ、少し足を滑らせた生徒がいた。

- ・雪渓で足を滑らせ下に落ちそうになった生徒がいたが、後ろにいた職員が止めた。
- ・バランスを崩した生徒が滑落し、つづら折の登山道下にいたガイドが生徒の体を受け止めた。生徒に怪我はなかったが、ガイドが怪我をした。
- ・登山靴ではない生徒が、雪の上で滑ってしまった。
- ・足を滑らせて、登山道から2メートルほど下の藪の中に滑落した生徒がいた。
- ・下山中足を滑らせ、登山道から落ちた。低木の中に落ち、2～3メートル滑り、木に引っかかって止まった。
- ・下山時風が強く、尾根上の歩行に気を使った。1名の生徒は、ガイドとロープを結んで下山した。
- ・強風にあおられて、転倒しそうになった生徒がいた。
- ・下山中、風にあおられて生徒の帽子が落下。拾おうとした生徒が登山道から外れた。
- ・下山中に生徒の足がもつれて、崖側に落ちそうになった。
- ・下山中生徒の片方の靴が脱げ、登山道から転げ落ちそうになった。
- ・雨の中の下山時、足元がたいへん滑りやすく、生徒や職員が幾度となく転倒した。
- ・クラス間の距離が開いたことで、道を間違えた。
- ・山小屋での一泊だったので、喘息の持病をもつ生徒（内服薬や吸入薬は持参）のことがとても気がかりだった。
- ・不安定な石の上に乗る、足を捻挫した。用意していたストックを使い本隊と同行動ができた。
- ・下山してきた他校の生徒が落とした石が自校の生徒の足に当たり、指先をいためた。
- ・浮石の乗ってしまった。
- ・小石をけて落としてしまった。
- ・投石をした生徒がいた。
- ・落石を起こし、下を歩いていた登山者に迷惑をかけた。
- ・下山中生徒が登山道脇にあった直径40センチメートルほどの石を落とした。幸い登山道の無い斜面を転がり落ちたため被害は無かった。
- ・登山隊の前方で落石があった。
- ・下山中に足を滑らせて、転倒した。
- ・雨上がりで、足元が滑った。
- ・天候の急変で、強い雨に遭った。
- ・雨が降り続き、雨具が破損したり、水漏れしたりして、びしょ濡れになってしまう生徒がいた。
- ・夜トイレに行こうとした生徒が、ベットのハシゴから足を踏み外して落下した。
- ・熊を目撃した。
- ・アブが大量発生した。
- ・ササダニにかまれた生徒がいた。下山後通院。
- ・崩落地帯があり、安全確保に気を使った。
- ・靴の底が突然はがれた。

ヒヤリ・ハットに関係して、下記のような記述もあった

- 常にヒヤリ・ハットを意識し、ちょっとしたことをトレーニング時から大切にしていく。例えば、整列を崩さない、時間を厳守する事等。
- 事前に危険箇所の把握を入念に行なったことで、ヒヤリ・ハットを防ぐことができた。

- (2) 集団登山の実施に当たって、先生方が課題と感じていること
(アンケート回収後、当センターが項目立てをして、それぞれの項目に分類した)

【学校行事として】

- ・ 全員参加が難しい行事になってきている。
- ・ 登山に参加できない生徒の割合が多い。
- ・ 健康面で心配な生徒がいたとき、目的とする山、宿泊場所をどこにすればいいのかの検討を何度も行なう必要があった。
- ・ 学年の多くの生徒が参加できる宿泊行事にしたいという考えで目的とする山を決めている。したがって、本格的な登山は難しい。
- ・ 体力に不安を感じる生徒が多い中、登山を通して、苦しさを乗り越えた達成感は味あわせたい。かといって、事前の段階で参加を断念する生徒が多い山にしてまで達成感を味あわせることがいいのかどうかは判らないという矛盾を感じている。
- ・ 登山の目的を設定する上で、実施前に、全員登頂させるかどうかしっかりと検討しておく必要性を感じる。
- ・ 少人数の学校の場合、全員が参加できる行事にしたい。登山は、その学年によっては全員参加が厳しい場合がある。
- ・ 安全、安心な登山を最優先することが欠かせない。
- ・ 他校との日程が重なる。
- ・ 山小屋の事情や学校の年間計画の作成上、予備日がとれない。
- ・ 日程面で、計画通り進まない可能性がある点。
- ・ 生徒たちの登山や山に対する興味や関心が薄く、意義付けや意欲付けをするのがたいへん。
- ・ 危険を伴う行事だからこそ、目的や方法などについて再考していく時期だと思う。
- ・ どれだけ事前に学習や準備をしても、人数も多く多様な生徒のいる学校登山においては、安全面が課題。
- ・ 自然を相手にすることや、生徒たちの体力低下、持病もち生徒の割合の増加、集団行動がとれない生徒の増加などで、行事として実施しにくい環境にある。また引率者の責任が激しく問われる世相も有り、職員も実施に及び腰となり、社会見学的行事に置き換えられていく傾向もある。学校単位ではなく、希望者を募ってしかるべきところ（例えば山岳総合センター）で実施していただく時代になったのかもしれない。
- ・ 時代を考えると、かつてのような厳しい精神や体力を鍛える場としての集団登山は難しくなっている。
- ・ 学校職員だけの引率が無理な時代になってきていると感じる。
- ・ 学校職員だけでなく、ガイドや医師等多数の引率者の確保が必要。
- ・ 行事が多い。
- ・ 他の行事もあり、設定日の決定が難しい。
- ・ 本格的な登山を実施したいが、装備にお金がかかる点等の理由から、保護者の理解が得にくい状況がある。
- ・ 学校行事としての意義付けなど、保護者の十分な理解を得るための手立てが必要。

【生徒にとって】

- ・ 年々、ハウスダスト、喘息の生徒が増加している点等の理由で、山小屋での宿泊が厳しい。
- ・ 生徒の中に、体力に不安をもち、また苦しいことから避ける傾向がみられるようになり、以前より辞退者が増加傾向にある。

- ・発達障害が疑われる生徒が増えている中で、安全な登山を実施するためにはどう配慮していったらよいか。
- ・生徒が、体力的にも精神的にも弱くなってきている。
- ・中学生の運動不足、体力の低下が問題視されている中、登山はあまりにも過酷過ぎる。特に1年生の登山は無理。2年生になったからといって問題は解消されず個人差が大きくなってしまう。
- ・1学年の登山実施は、体力的にも精神的にも苦しい面がある。
- ・安全重視の傾向の中、登山の醍醐味が味わえるようなコース設定ができにくくなってきている。
- ・生徒が山嫌いにならないように、できるだけ登りやすいルートを選ぶようにしている。
- ・登るルートと下山ルートが違うため、調子の悪くなった生徒の対応が難しい。
- ・1, 2年合同実施ということで、目的とした山が適切かどうか検討して実施していく必要がある。
- ・比較的簡単なコースにもかかわらず、女子の中には体力的にもきつい生徒がいる。
- ・登山に参加できない生徒の対応が難しい。

【保護者にとって】

- ・保護者の不安解消。
- ・滑落事故の報道等が増えている中、保護者の中に不安が広がっている。
- ・積極的に集団登山を後押しする保護者が減少してきている。
- ・登山文化の無い他府県からの移動に伴う家庭が増えてくると、目的共有が難しくなることが予想される。
- ・本年度、目的地を唐松頂上から丸山ケルンまでとしたら、保護者から「頂上まで登らなければ登山の意味が無い」という意見があった。頂上まで行く場合には、不参加者がもっと増えたと考えたと、どちらがよいのか結論はでないと思う。

【費用面として】

- ・母集団の人数が少ないと、費用面で課題。
- ・町から補助金が出ないと、保護者負担が高額になってしまう。
- ・服装や装備などが、他行事に比べて高価。
- ・一回の登山であるが、カップ、リュック、靴等安全を考えると高価なものが必要となる。家庭の負担が大きい。
- ・安全確保のため、ガイドを1クラスに一人つけたいが、費用が高くなってしまう。

【学校側として】

- ・登山に同行する医師や看護師の確保が難しい。
- ・費用面で、医師や看護師の確保が難しい。
- ・県の引率規定人数により、十分な引率職員が確保できない場合がある。
- ・職員の数が少なくなるので、十分な引率者人員が確保できない。
- ・天気の関係で、計画通りにならないことが多い。天候の判断が難しい。
- ・過去の事例も影響して、何か重大な事故が起こったら・・・というマイナス思考がある。
- ・途中で引き返す生徒の対応を、事前にしっかり決めておく必要がある。
- ・途中で別行動を余儀なくされた生徒が出た場合、引率職員数の余裕が無いので、本隊の安全確保などの面で不安が残る。
- ・登山の事前学習の時間確保が難しい。

- ・登山の仕方についてある程度訓練しておく必要があるが、なかなかその授業時数が確保できない。体力作りを含めると、10時間は必要。
- ・無線機の免許を持った職員がいると良い。

【先生方にとって】

- ・山の経験の少ない学校職員だけの引率は、不安や危険を感じる。
- ・登山経験の無い教師が登山を引率しなければいけない場合がある。
- ・万全な準備のために、引率者が、登山の知識や技術を高める必要がある。
- ・引率職員の中に、体力、技術に自信がもてない者が出ていて、無理をさせられない。
- ・途中で下山せざるを得ない場合の判断や職員の動きがむずかしい。
- ・緊急時の対応に時間がかかる点。
- ・教職員の高齢化。スキルや体力の不足。
- ・引率者の責任が重い。
- ・「山の日」制定の話題もあり、長野県の学校は学校登山をすることが当然のような雰囲気になるのが怖い。何百人という生徒の安全を考えて登山をする教員の負担は相当なものであり、事故が起きたときの責任を考えると、できれば登山をやりたくないのが本音である。

【登山がもっているものとして】

- ・天気によって大きく左右される命がけの行事が、果たして必要なのか疑問。
- ・天候に左右されやすく、延期になったり中止になったりすることが多い。
- ・緊急時の対応に時間がかかる点。
- ・頂上でご来光を見るために、かなり早朝起床になる点。
- ・実施時期が、梅雨の時期と重なるために、日程変更の可能性が高いこと。
- ・実施するか延期するか为天候判断が難しい行事。
- ・生徒の実態に応じたペース配分の仕方。
- ・大人数の学校は、列が長くなり、休憩場所が危険な場所になることがある。
- ・登り始めると列が長くなり、職員が集まって話をすることが多くもてない。
- ・登山ブームのためか山が込み合って、すれ違いに時間がかかる。そのために、生徒の集中力や体力面にマイナスになっている面がある。
- ・乗鞍岳が登山といえるのか。(ハイキング?)
- ・装備が劣化しているかどうかの判断が難しい。
- ・天候が変化した際の服装の指示が難しい。
- ・登山が延期になった際、当初予定していた時との気候の違いを考える必要がある。
- ・登山が延期になったことで、山小屋の診療所がしまっしまい不安を感じた。
- ・登山道の途中にトイレが無いために、生徒が水分補給を我慢してしまうことがある。
- ・場所にもよるが、下見時と本番当日のルートの様子が違うこと。(雪の状態等)

課題を書く欄に、下記のような「集団登山の意義」に関する記述もあった

- 登山は、自分の足で登るという貴重な体験の場。
- 地元の山であり、ふるさとを知るうえでも継続していききたい行事。
- 全職員でサポートする体制と、地元の遭対協の皆様のご協力によって支えられている。
- 郷土の名山に登る意義は大きい。
- 心や体を鍛え、人生の節目となるうえでの良い行事。
- 本校は全員参加を基本としている。体力面で不安な生徒や持病のある生徒も、中房温泉周辺で学習を行なうことができるので、燕岳登山についてはあまり課題を感じない。

- 地元の山、いつも見えている山に登るという体験はとても貴重なことだと考えている。
- 長野県の中学生であるから、生徒たちに、一度は北アルプスなどの登山を通して、山の魅力に触れる機会を与えたい。

まとめと考察

1. 登山の実施状況および目的とする山について

H22の調査と比較すると、登山計画のない学校が6校増えてはいるものの、ここ10年間では、県内の公立及び私立中学校の9割近い学校が登山を実施しているということがわかる。

また、本アンケートにも集団登山の実施に当たっての課題として挙げられていた「登山に参加できない生徒の割合」については、その学校・学年によって違いはあるものの、県内全体では、1クラスを30人学級とした時、平均するとクラスで1人の生徒が最初から不参加を予定していた。

「登山」という行事は、個々の生徒に合わせて「部分参加」といったような参加の仕方を探ることが難しい。そのために、体力面で不安を感じていたり持病を持っていたりする生徒は、計画段階から不参加を決めてしまう結果となり、そのことが先生方にとって課題となっているのではないだろうか。この点では、ある学校のように、「全員参加を基本として、体力面で不安な生徒や持病のある生徒については、参加の仕方を工夫する」という記述が参考になると思う。

目的とする山については、H15の調査研究のまとめで、「標高がある程度あってもアプローチの楽な山が増えている」と分析しているが、その傾向は依然続いている。アプローチの楽な山を選ぶことで、より多くの生徒が登頂できたり、アタックチャンスが1回から2回に増えたりするというメリットがある。

また、生徒にとって身近に感じられる山に変更した学校もある。必ずしも「高い山」「険しい山」に登ることのほうが、中学校の集団登山として価値があるとはいえない。中学校の集団登山は、「山」という教材や「登山」という活動を通じた学習であるという点を考えれば、地元の山に登るということもまた意義のあることだと思う。

アンケートの「登山計画の変更について」の項目の中に、「登山を通して、生徒に達成感を味あわせたり、励ましあって登ることで集団としての団結を深めたりしてほしいと願って、(昨年は登山を実施していなかったが)登山を実施するようにした」「より自然の偉大さ、美しさ、厳しさに触れることができ、登山での達成感を得ることができるように考えて」という記述があった。ここに書かれているように、「学校集団登山」がもつ意義は大きい。だからこそ、長野県では、「学校集団登山」という伝統が脈々と続いている。その学年の生徒の実態にあわせて山域・ルートを選び、できるだけ多くの生徒が「安全に楽しく」登ることができるように学校集団登山を計画、実施することを今後も更にすすめてほしい。

2. 外部からの付き添いについて

外部からの付き添いの中で、特に先生方にとって心強い「ガイド・案内人」「看護師」「医師」の付き添いがあった学校数は、H22と大きな違いはない。H4の時点では、「ガイド・案内人」の付き添いは約3校に1校だったが、ここ何年かは、8割を超える学校で

「ガイド・案内人」が隊に付き添っている。

その「ガイド・案内人」「看護師」「医師」の付き添いの点で、いくつかの課題が出されている。

1点目は、付き添いの方がなかなか確保できない点である。毎年お願いしている方が決まっていたり、地元の方で付き添いをお願いできる方がいたりすれば問題がないが、学校によっては、お願いをする付き添いの方を探すのに苦労しているようだ。「紹介してくれる機関があれば」という記載があったが、その機関として、「信州登山案内人」を所轄している「県観光部 山岳高原観光課」や、「長野県山岳総合センター」をぜひ利用していただきたい。「山岳高原観光課」では、案内人の活動機会の増進を図っている。必要ならば、ぜひ問い合わせをしてほしい。

2点目は、費用の面である。今回の調査では、1校あたりの「ガイド・案内人」の数は調べなかったため数字はわからないが、クラス数が多くても「ガイド・案内人」が1～2人という学校もいくつかあると思われる。生徒たちが「安全で楽しく」登ることができるため、また先生方の「登山」における特に安全面の負担を少しでも減らすために、各市町村での「学校登山」における公費の負担を今以上にぜひお願いしたい。隊に複数の「ガイド・案内人」そして「医師」または「看護師」の付き添いがあれば、先生方にとってはたいへん心強い。

3点目は、付き添いの方の登山へのかかわりの面での課題である。先生方と「ガイド・案内人」の方が登山の当日初めて顔を合わせるというのでは、うまくコミュニケーションも図れないと思う。事前学習の時間に「ガイド・案内人」の方に学校に出向いてもらい、「山の魅力」を生徒に語ってもらったり、できれば登山の下見の際に「ガイド・案内人」の方に同行してもらったりできると良い。先生方には、積極的に「ガイド・案内人」の方と連絡を取り合ってもらい、「ガイド・案内人」の協力で、より「安全で楽しい」登山にしてほしい。

3. 装備について

今回の調査では、「ツェルト」を持参した学校が87校と、初めて半数以上の学校が持参しているという結果が出た。

登山の場合、危急時に備えてその対策用の装備を携行するのは常識といえる。その点で、怪我人や体調の悪い生徒が出たときに、緊急避難用のツェルト（簡易テント）のような「シェルター」的なものが必要になる。怪我人や体調の悪い生徒が、風雨に吹きさらしの状態になることは絶対に避けなければいけない。

山岳総合センターでは、センター研修講座や学校体育・スポーツ研究協議会等の場で、ツェルトの効果や使い方について講義や実演を行い、ツェルトの重要性を訴えており、その成果が上がってきたと考える。今後更にツェルト等の「シェルター」的なものを携行する学校が増えるためにも、学校備品として購入し、事前にその使い方を体験することを勧める。

また、使用頻度が多いトランシーバーについては、ぜひトランシーバーと携帯電話の違いを理解して、有効なトランシーバーの利用の仕方を身につけてほしい。山岳総合センターの「集団登山引率者研修会」では、トランシーバーの有効な使い方の実技研修も行なっている。参加を勧める。

危急時対策として持参する装備は、結果として使用しないのが一番である。しかし登山に限らず「野外活動」では思いがけないことが起き得る。その様な事態に備えて、装備はもちろん、「リスクマネジメント」にも十分心がけてほしい。

アンケートの中に、「事前に危険箇所の把握を入念に行なったことで、ヒヤリ・ハットを防ぐことができた」という学校があった。事前下見では、子ども達の目線に立って、子ども達にとって危険がないかどうかという観点で、ルートの様子を確認したり、山小屋の

方と打ち合わせをしたりするようにしたい。

4. 登山中の体調不良等について

かつてのセンターの調査結果から、2000メートルを超える山に生徒を引率する場合、生徒の約1%は高山病を発症する可能性があることがわかっている。

今回の調査でも、高山に登ったことが原因と考えられる可能性の高い「体調不良」の生徒117人と、「高山病」の生徒77人を合わせた194人は、登山に参加した生徒の約1パーセントに当たるという結果がでている。100人の生徒がいれば、1人くらい「高山病」を発症するということが言えるということが、あらためて判った。

この「高山病」を発症させないためには、バスから降りてすぐに登り出さずに、しばらくその高度に慣れることや、水分をしっかり補給することが大切になってくる。

先生方の「課題」の中に、「登山道の途中にトイレがないために、生徒が水分補給を我慢してしまうこと」という記述があった。特に女子生徒のことだと思うが、例えば、「ツェルト」で囲いを作って用を足すことができるようにする工夫も可能である。登山中はぜひ十分な水分補給を心がけてほしい。

人数としてはわずかであったが、「高所恐怖症」が原因で予定していた行動ができなくなった生徒が3人いた。このような生徒については、健康面の事前調査等で正確な情報をつかんで、適切な対応をしたい。

5. 事前学習や事前準備について

「登山のしおり作成」や「下見登山」、「写真の掲示」等は、ほとんどの学校で取り組んでいるが、ガイドや山小屋の方から話を聞くという学校は4校に1校の割合であった。費用の面や時間確保の難しさだったり、身近に頼める方がいなかったりで、外部の方から話を聞くと言うのは簡単にはいかない面もあるだろうが、生徒たちに思い出に残る登山をしてもらうためにも、ぜひ山の専門家から話を聞く機会をもつことを勧める。

「山の専門家」は山の魅力を感じているからこそ、専門的に登山に取り組んだり、山の仕事に就いていたりしている。このような方は、「山の魅力」を雄弁に語ってくれるはずである。この点では、信州登山案内人の活動機会の増進を図っている県の山岳高原観光課にも協力をお願いしたい。学校からの希望があれば、「信州登山案内人」を派遣できるような仕組みづくりをすすめることを提案する。

事前学習の取り組みとして、それぞれのテーマについて調べた内容をまとめた「登山新聞」を作成したという学校があった。自分たちが登る山をできるだけ身近なものに感じ、登山に主体的に取り組むという点で、たいへん良い事例のひとつだと思う。

学校集団登山は、多くの一般的な登山と違って、頂上に立つことだけが目的ではない。登山本番に向けて、自分の登る山を知ったり、登山に向けたトレーニングをしていく中で気持ちを高めたりするという事前学習や事前準備の後、登山当日、先生に励まされたり友達同士で励ましあったりした末に、苦勞して頂上に立ったという経験は、他の何物にも代え難いものだと思う。

「登山学習」の内容の充実に向けての更なる検討をお願いしたい。

6. 最後に

長野県は日本を代表する山岳県である。この山岳県長野で伝統的に行なわれている「学

校集団登山」は、他県の子供達には体験したくてもできない貴重なものである。小・中学生の時に体験する「登山」が、現在よりも更に子供達にとって「安全で楽しい」もの、また意義のあるものになってほしいと思う。

一方で、たいへん残念なことに、「学校集団登山が“山嫌い”をつくっているのではないか」という声も無い訳ではない。また、今回のアンケートの中にも、「できれば登山をやりたくないのが本音」という先生の見解もあった。

長野県では、平成26年度は「信州の山 新世紀元年」ということで、“信州の山”を盛り上げようとする行政の動きがある。「五感で感じる山」というテーマでは、「山に親しみ、学ぶ機会の創出」や「山の魅力発信」に取り組むことが示されている。

このような流れの中で、「学校集団登山」を、この「山に親しみ、学ぶ機会の創出」や「山の魅力発信」の取り組みのうちのひとつとして、今まで以上に、その「意義」や「実施の仕方」を考えてみてはどうだろうか。その結果、「学校集団登山」が“信州の山”を盛り上げるような動きにも結びついていくのではないかと思う。もちろん、「学校集団登山」は、「教育」の一環であるということは忘れてはならない。

「学校集団登山」は、「山岳観光県確立」に向けての大事な一歩だと考える。

長野県山岳総合センターとしても、「研修会開催」や「情報提供」等で、「学校集団登山」が“信州の山”を盛り上げるような動きに協力していきたい。

今回のアンケート調査では、お忙しい中、御協力たいへんありがとうございました。